根釧台地の格子状防風林（中標津町など）

防風と防霧兼ね 1万5708ヘクタール

上空から見なければとても「絵」には見えないナスカの地上絵（南米ペルー）。人工衛星からも鮮明に見えることで知られるが、それに匹敵する地上絵が本道にある。根釧台地の格子状防風林。毛利衛さんが乗ったスペースシャトル・エンデバーから送られた映像は、なるほど碁盤目状に掘られた水路のようだ。

摩周湖を眼下に望むこともあれば釧路湿原の上空を飛ぶこともある〝日替わり空路〟の中標津空港便。知床連峰を間近に望みながら高度を下げ、雲海を抜けたあたりで広大な牧草地を区切るカラマツ林が見えてくる。

これが地上絵の正体。「何の変哲もない林」にしか見えないのは、高度不足のせい。二百数十キロ上空を飛ぶスペースシャトルの宇宙飛行士だけに許された感動なのだ。

中標津町の歴史小説家、佐々木譲さん（52）は「グレート・グリーン・グリッド（偉大なる緑の格子）」と呼び、「意識のフィルターをくぐらせる」ことを勧める。

選定前までは誰にも注目されない林だ

私と遺産

「ナカシの地上絵」と命名

「何だ、これは」。フライトシミュレーターで飛行を疑似体験していた飯島実さん（52）は、高度10万フィート（約30キロ）まで機体を上昇させたとき、整然と区画された格子の存在に気づき、「ナスカ」ならぬ「ナカシの地上絵」と命名した。東京航空局中標津出張所長をしていた99年のことだ。

赴任したころから妙に気になる林だった。「高さが見事に同じということは、枯れるのも一斉だろうな」と。林業予算が大幅に削られ、下草刈りや間伐もままならず、すでに枯れている林もあった。単一樹種に頼ることの危うさも感じた。

ナスカのような「単なる遺跡」にしてはいけないと思う。巨大な工作物を手がけた以上は、日本全体の資産としてきちんと残していかなければならない。単なる「人寄せ材料」ではなく、そこに暮らす人々にも動物にもプラスになる「生きた林」として。

間もなく職を辞し、中標津に自分で汗を流して山小屋を造る計画だ。そして「自分にもできることはないか」と生きがい探しをしているお年寄りを仲間に引き入れ、森づくりの実践を考えている。「300年先を見すえた夢のプロジェクトです」